

## 21 急性虫垂炎からガス壊疽の発症が疑われた1例

本多 忠幸・大橋さとみ (新潟大学大学院  
医歯学総合研究科  
救命救急医学分野)  
遠藤 裕  
榛沢 和彦・小村 昇 (新潟大学医学部附属  
佐藤 一範 (病院集中治療部))  
筒井 寿基・米山 健志 (新潟大学大学院  
医歯学総合研究科  
腎・泌尿器病態学分野)

急性虫垂炎を発症し、後腹膜にガス壊疽を併発した稀な症例を経験したので報告した。【症例】57歳男性。右下側腹部痛出現、疼痛が拡大し、7日目に総合病院へ入院した。右背側皮下と後腹膜のガス像の画像診断からガス壊疽を疑った。切開・排膿ドレナージ施行後、同日当院へ転院となった。来院時、JCS 20、低血圧、腎機能低下、代謝性アシドーシスを認めた。側腹部を追加切開・排膿し、皮下組織から筋層に壊死を認めた。また、膿・血液から E. coli, Clostridium が検出された。エンドトキシン吸着後、CHDF を開始した。高圧酸素療法を行ったが壊死は拡大した。入院22日目に永眠された。剖検所見：虫垂周辺から膿瘍が後腹膜に通じていた。

## 22 亜硫酸中毒の診療における二次被害

—— 症例に学ぶ除染システムの構築 ——

木下 秀則・広瀬 保夫 (新潟市民病院)  
田中 敏春・山崎 芳彦 (救命救急センター)  
傳田 定平・佐久間一弘  
榎木 永・国分誠一郎  
渡辺幸之助 (同 麻酔科)  
生駒 美穂 (長岡赤十字病院)

診療者側に多数の二次被害を生じた、亜硫酸中毒症例を経験したので報告する。症例は54歳、男性。自殺目的に亜硫酸 20g を服毒し、当院に搬送された。胃洗浄後も砒素塊の残存を認め、上部消化管内視鏡で直下に著明なびらんを認めた。残存する砒素による胃穿孔を回避するために、同日胃全摘術を施行した。手術は無事終了したが、帰宅後まもなく心停止し、一旦は蘇生されるものの、治療抵抗性の急性循環不全により翌日死亡した。

一連の診療過程において、多くの診療者が眼・喉の痛み、頭痛、全身倦怠感を訴え一部は角膜び

らん、喉頭蓋炎の診断を受けたが、重篤な後遺症を来したものはなかった。

亜硫酸は酸と反応して猛毒の砒化水素を発生する。亜硫酸経口中毒患者の診療に際しては、砒化水素の発生による二次被害の可能性を考慮し、適切な防護措置を講ずる必要がある。

## 23 上越における CPAOA 患者の1年間の集計結果

金井 啓一・丸田 正 (上越地域消防)  
丸山 茂樹・小川 茂樹 (事務組合)  
丸山 正則・渡邊 逸平 (県立中央病院  
麻酔科)

病院外心肺停止(以下 CPA)症例の蘇生に関する情報を、地域網羅的かつ pro-spective に収集検討する方法として、ウツタイン様式が一般的なものになりつつある。当上越消防管内では、昨年の10月からウツタイン様式による集計を開始し丁度1年を経過したのでその結果を報告する。心室細動例は4%に過ぎなかった。バイスタンダーによる CPR 実施例の方が心拍再開率は高かった。特定行為による心拍再開率の差はみられなかった。目撃者が救急隊員である場合は、心拍再開率、生存退院率ともに高かった。対象心停止患者数が205人と少なく、現時点では断定的なことは言えないが、ウツタイン様式には不完全と思われる部分も多々あり、県単位などの上部機関における改訂、統一基準化が望まれる。

## 24 外傷性ショックと診断される CPAOA 患者の死因について

丸山 正則・渡邊 逸平  
小林 千絵・若井 綾子 (県立中央病院)  
林 隆宏 (麻酔科)

外傷による心肺停止(CPA)患者で、外傷そのものは死に至るほどのものとは考えられず、死因が特定できない場合が少なくない。当院救急外来に交通事故による CPA で搬入され、後に興味深い結果が判明した2例を紹介し、外傷性ショックと診断される CPA 患者の死因につき考察してみ